

仁と慈悲博愛

東京帝大講師
文學博士

山口 察 常

一

茲に題して仁と慈悲、博愛といふ。主としては仁を述べ、之に加へては慈悲、博愛とは何かを説き、隨つて斯の三者の關係を考へようとするのが本意である。仁の事は既に人々によつて説かれてゐるから大體の概念は知られてゐる事と思ふが、さて仁とは何かと云ふ其の眞義を探究するとなると、中々簡單には片づかない。私は數年前から其の探究に着手して、近頃漸く之を纏め、論文に作り上げたが、こゝには其の一端を述べて、次に慈悲、博愛との關係に説き及びたいと思ふ。そこで順序として最初には先づ、從來仁がどんな風に説かれてゐるか、仁の解釋の種々相について述べる事とする。

初めに文字の事から言はう。仁の字はどんな意味を持つてゐるかと云ふと、昔は元の形に書いたのであつて、二が上であり、其處から下へ二本垂れてゐる象である。これに今一本加へると示の字であつて、神祇の兩字共に此の示に關係がある。即ち神關係の字である。併し普通には、仁は人から二に从

ふで、二人の意に解釋する。それが何を示すかに就ては別に後説するが、古い字書には仁は親也とあつて、其の説明は判然しない。又今一つ仁の古文は「忝」である。今は全く使用しないが、千は100×10の意でなく只大多數で、千の心と書いて大多數の心であらう。これも只それだけでは意味が分らないが、恐らく古今内意の變化した結果であらう。更に今一つ仁は「元」とも同字である、故に易の元亨利貞は仁禮義智に當るのである。併し今は多く其れ等の問題に觸れないで置かう。

次に仁を初めて支那で説いたのは孔子である。尤もそれ以前から仁の語はあつたが、甚だ簡單なもので、それが重んぜられたのはやはり孔子以來である。仁に就ての孔説を見る材料は論語であつて、全篇一萬二千七百字の中に、仁字は五十八箇所互つて百八字出て来る。之を見ても如何に仁が多く説かれてゐるか分るのである。仔細に其の場合を検討してみると、第一には門弟子の間に答へた説明、又は人を評して其の仁の有無を論じた語など、種々の意味に使はれてゐるが、併し仁とは何ぞやと云ふ定義は與へてゐない。孔子は教育の熱心家で、いつも人に教を説く時には、個人の機に應じて、對症療法的に都合よく答へる。故に時としては同一人にも異なつた説明をしてゐる。實に面白い現象である。そこで孔子からは仁の定義を聽き出せない。仁の孔説の中で最も定義らしいものは、樊遲が仁を問ふたのに對して、「子曰、愛人」、此の「人ヲ愛ス」の一語であらう。ところが又、「克己復禮爲仁」とも云つて

ゐる。まるで其の間の關係は考へられない。さうかと思ふと「又仁者其言也訥」とも云つてゐる。斯く孔語を拾つて見ても結局何の事か分らない。それでは人を評してどんな人を仁としてゐるかを調べて見ると、例へば「殷有三仁」の語がある。三仁とは微子・箕子・比干の三人であつて、これは實人格の現れの上に於て見た孔子の仁説の一端である。其の外には又、管仲、夷齊を以て仁者としてゐる。是等が大體孔子の見た仁者であるが、その行動を見ると一々皆異なつてゐる。どう云ふ行爲を指して仁と云つてゐるのか見當が附かない。こんなわけで、孔語から定義的な仁の内容を探し出すことは不可能であるが、而も其れで通用して、何者も不審を抱いてゐない。そこで止むなく、後代へ後代へと其の解釋を追うてゆく外はない。

二

孔子の後に仁を説いた人としては、先づ曾子、子思に注目される。曾子とは曾參である。孔子と曾子とは四十六歳も年齢が違つてゐるから、これは晩年の弟子である。孔門十哲の中へ入つてゐないのは、年が若かつたからであらう。併し孔子晩年の弟子であるが故に、曾參は師の圓熟した人格を範とした。其の上に又極めて篤行家であつた。孔子も之を評して、「參也魯」と云つた。これは面白い評であつて、魯とはノロイ事である。ハキハキせぬ事である。其處に曾子が真正直に孔子の教を受けてゐる面目が現

れてゐる。凡そ何の道でも一子相傳とする程の藝能は、才子肌ではないハキハキせぬ人に傳へるのが本則であつて、唯だ一圖に師を紹ぐ人でなければならぬとされてゐる。曾參は其の傾きのある人だつたのであらう。孔子は此の人に「吾道一以貫之」と云つてゐる。自分は今までに色々の事を言つてゐるが、本道は一貫してゐるのだと教へてゐる。すると、「曾子曰、唯」で、曾參は唯一言ハイト云つただけである。「唯」の外に「諾」といふ返事もあるが、諾の方は幾分のろい。唯は即座の返事である。響の聲に應ずるが如きハイト云ふ返事である。なぜ曾子が此の時ハイト言つたのかは餘人に分らない。そこが以心傳心である。で、孔子が出で去つて後、他の門人が審かつて「何ノ謂ゾヤ」と尋ねると、曾子は言下に、「夫子之道忠恕而已矣」と答へた。斯の如く斷然たる答を與へてゐるのは、篤く信ずる所あつての事に違ひない。故に忠恕は即ち孔子の一貫の道であるが、而も忠と恕とは本來二つである。何故にそれが一つになるのか、曾子も其の一貫の道を直ちに説明してはゐない。先づ忠とは真心を盡す事である。恕とは忖度であつて己を推して人に及ぼす心である。此の二つが一貫して仁に歸するといふ事はちよつと想像がつかぬが、併し論語の戴註には、一は仁を云ふのだとしてゐる。又、竹添氏の論語解説にも、これは仁でなければならぬとしてゐる。當然一貫の道が仁であるとする、曾子は之を内容的に解説して「忠恕而已矣」と答へたものと見て可からう。

爾次には子思であるが、これは孔子の孫である。孔子薨逝の時にはまだ十二三歳であるから、餘り多くを孔子から受けないで、曾子に教へられたと傳へられてゐるが、多分事實であらう。曾子は前にも述べた通り孔子直傳の弟子であるから、大體に於て祖父の遺教の繼承者であるとして見てよからう。ところが此の子思は「仁者人也」即ち仁とは「人」であるとしてゐる。これは甚だ面白い説であつて、此の仁は人也と云ふ事の説明をするだけでも、委しく互れば二三時間を要するが、結局やはり人間といふ事に落ちつく。人の古義は人耦であつて、耦は「伴れ合ひ」「相棒」の意を示す。人が互に人と相耦してゐる、それが即ち人耦する所以である。これは古註の説明であるが、此の一人と彼の一人とが相人耦するのは、忠恕を盡すの意である、相手と同等と考へて付き合ふ意である。其處に仁の義が存するのである。又今一つ子思の解義に、己を成すは仁であつて、物を成すは知であるといふ事がある。之に就ても色々説があるが、己を成すのが仁であると云ふのは合點が行かぬと云ふので、中井履軒は、之を間違ひであるとし、己を成すは知也、物を成すは仁也と訂正してゐる。如何にもさう變へれば意味がよく通るが、己を成すは仁也でも差支はない。固より只これだけでは分り難いが、中庸には誠を以て一貫の道とし、其の働きを仁と知との二つとし、自己完成が仁であるといふ意味を説いて、自分の誠を盡すのが第一に貴い事である、換言すれば、自己完成が無ければ人に對する理解が出来ないとしてゐる。自己が完成し

てゐれば己の心を推して人の心がわかる、自ら知ることは人を知ることである、人が分れば全人類は勿論、人以外の生物の心も理解することが出来る、これが即ち「成己仁也、成物知也」であつて、物の精を盡すには理解が要る、其處に知があるとす。此の知と仁との二つは、即ち佛教に於ける般若と慈悲とであつて、此の二つが無ければ、佛教を成さない。故に儒教から見ても、佛教から見ても、要するに人間の本質發揮は知と仁とでなければならぬのである。

三

次は孟子である。これは孔子に後るゝこと百二三十年の人であつて、教を子思の門弟子に受けたと云はれてゐる。其の説を見ても大體に於て子思の語に據つてゐる。即ち仁は人も其の解釋に立ち、又、仁は親に仕へる事で、故に仁は親を親むを大と爲すとしてゐる。なほ其の外に又、論語から「愛人」の語を受けて説明してゐる。斯く中庸及び論語から受けてはゐるが、別に孟子一家の説として、最も能く仁の意義を解し得てゐるのは、仁を以て人に忍びざる心、惻隱の心として説明してゐる事である。而も孟子は、それ等の心を以て其の儘仁であるとせず、仁の一端としてゐる。即ち公孫丑章句上には、仁を四端の中に算へて、「惻隱之心、仁之端也」としてゐる。仁之端とは仁の端くれ、糸口の義であつて、謂はゞ萌芽であるが、孟子は其の四端を各々擴充すべきことを論じてゐる。即ち之を専ら仁に就て言ふなら

ば、其の仁の萌芽である。人に忍びざる心、惻隱の心を養ひ育て、擴大充實せよと教へてゐるのである。そこで其の人に忍びざる心とは何であるかと云ふと、特記するまでもなく、忍は心胸に刃を持つてゐる象の字であつて、忍耐は美德であるが、轉じて残忍となると惡字である。何れにしても「こらへる」状態であるが、佛教でも同じ意味で忍を説く。人に忍びざる心とは、人の爲にぢつと堪へ忍んでゐる事の出來ない心狀を指す。孟子は即ち其の心狀を以て仁の端だとしてゐるのである。それは一例を以て言ふと、井戸端に幼兒が遊んでゐて、今にも落ち込みさうなのを見ると、ぢつと傍觀してゐられないで、誰でも直ぐに飛んで行つて之を安全地に移す。これは人間自然の心の働きであつて、それが見知らぬ家の兒であつても、他人の生命の危険を見ては、人情坐視するに忍びないのが即ち人に忍びざる心である。此の場合特に人に忍びざる心といふ其の「人に」が肝腎であつて、自分の爲になら普通の事である。故に最も大切な意味を「人に」の一語に繋けて、人に忍びざる心が仁の端であると孟子は解したのである。よく話に出る事であるが、小學校の訓導が受持兒童の溺没の危険を目撃して、見るに見かねて飛び込んで、遂に自分も共に溺死したのを、世間では非常に賞讃して、其の場所に表彰碑を建てる。これは確に美事であつて、單なる西洋式の責任觀念の上からすれば、到底救助の餘地がない場合、自己の生命を犠牲にしてまでも飛込まねばならぬ事はない、との議論が立つかも知れないが、そんな場合我を忘れて本

能的、反射的に飛出して行つて助けようとする、それが人情の自然であつて、即ち人に忍びざる心である。助けなければ人情に反するとか、助けなくても義務が済むとかいふやうな事を考へてゐては間に合はない。又、實際そんな事を考へてる者もない。茲に仁が何人の胸奥にも皆具はつてゐるものである事が分るのである。

斯の如く仁を以て、人に忍びざる心、惻隱の心としてゐるのは甚だ優れた説明であると思ふが、更に又、孟子は、親に對する仁、一般人に對する仁、人間以外の者に對する仁と細かく別けても説明してゐる。併しこゝには省略しよう。

四

さて曾子・子思・孟子と孔子直系の人々の解釋は右の如くであるが、次には今少し後代の學者の仁說を調べて見よう。漢代の學者の仁の解釋は色々あるが、最も注意すべきものは董仲舒の『春秋繁露』と、次いで『淮南子』であらう。是等にあつては人類愛の立場に於て仁を説いてゐる。即ち普く群生を愛して人を愛しないのは仁ではない、仁は其の類を愛する事であるとしてゐる。大體に於て仁は人間に對する愛、同類愛だと觀てゐる點に於て、「愛」の語を離れない説き方である。

次に唐に入つては韓退之が、博愛之を仁と云ふとしてゐる。即ち漢唐を通じて、大體仁を愛と見るこ

と、殊に人間の愛、同類愛と観ることに於て一致してゐるのである。

ところが轉じて宋代に入ると、仁といふ事が漸く複雑な問題性を帯びて、色々な説が出され、盛に評論された。随つて宋の學者には仁説が甚だ多くて、到底一々に互つては述べ盡せない。就中最も注目すべきもので比較的纏まつたものは張南軒の『洙泗言仁』及び朱子の仁説等であつて、其の他に又程明道は、天地の大徳を生と云ふ、萬物の生意見るべし、これ所謂仁なりと述べてゐる。天地の大徳を生と云ふとは、凡そ宇宙の物は皆、天地自然に生れる、此の天地の大きな働きは仁である、人の持つてゐる生成の徳だと云ふ意味である。親はなくとも子は育つといふのは、子供それ自身成育する素質を持つてゐることを示す。又、知らぬ間に草が延びるのは、草そのものに延びる素質が存在してゐるからである。これが萬物の生意最も見るべしであつて、生きてゐる事即ち仁の現れである、と見るのである。

又程明道の語に、切脈最も仁を體すべし、脈動けば仁ありとある。これも生きてゐること即ち仁の意である。切脈最も仁を體すべし、とは言ひ得て面白い。人には生きる働きがあり、又、あらゆる生物が生きる性を持つてゐる所に仁があるとしてゐる、其處に物我一體説が成り立つのである。ところが此の明道の弟の程伊川は、漢代に仁を以て愛と説いてゐるのを不可とし、仁者は必ず愛す、而も愛を指して仁とするのは即ち不可なりとしてゐる。これは甚だ味ふべき語であつて、確に一道の眞理がある。愛す

る者必ずしも仁であるとは云へない。そこで程伊川は更に説を立てて、「仁道名づけ難し、惟公之に近し」と云つてゐる。或は仁は天下の公とも云つてゐる。即ち愛では足らぬ所があるとしてゐるのである。次に又明道の弟子楊氏は、明道の語の切脈と云ふ事から思ひついて、知覺は即ち仁なりと説いてゐる。自分は生きてゐると知覺する時、其處に仁があるとするのである。

こんな風に宋代學者の仁説は幾らもあるが、他は省略する。とにかく宋代には仁が色々の方面から説かれた、それを總括し集大成し、色々考へて自説を立てたのが朱子であつて、殊に張南軒とは友人であつた所から、互に研究し合つたらしく、兩者の間に問答を交はした手紙が、今に多く残つてゐるのを調べて見ると、殊に仁論に關するものが最多數を占めてゐるのである。その様なわけで、朱子の仁説は集大成的代表的なものであるが、其の朱子が、仁とは心の徳、愛の理であると説いてゐる。一方から見ると、仁は人心に有する特質であつて、同時に愛が出て來る、其處に理があるとするのである。此の朱子の語が仁の總括的な定義であるとは必ずしも云へないが、併し苦心の結果に成つたものであることは確である。宋代以後にも種々の仁説があり、又日本學者の説もあるが、さまではと思つて省略する。

そこで仁とは何ぞやといふ事を、最初から改めて見直すと、第一には仁とは人であるとの説である。更にそれでは人とは何かと云ふと、科學者は、人類は類人猿から進化したものであるといふ。併し起源

論は扱置いて人類には他の生物に比べて特殊なものを持つてゐる。それは生命の自覺である。あらゆる生物は皆生命現象を營んでゐるが、その生命の自覺を持つてゐるのは人間の外にないのである。次に人類が持つ特色は依存生活である。人類は唯一人では生きられない、此處に大きな特色が存するのである。尤も他の動物も依存生活に類した事はやつてゐるが、特に人類にあつては、統制のある群居生活を營んでゐる事が大切な條件であると思ふ。乃ち以上二つの特色が人類の本質的な特色であるとする、其處に自づから仁と相通ずる意味が出て来る。仁は人であるとする説は、即ち此の人類の特質を基本にして考へ出された人間本位説である。人間自己の本性を振りかへつて見ると、發達すべき個性の自覺がある、これが生命の自覺である。既に其の自覺があれば、其處に營まれる生活は、個々獨立の生活ではなくして、團體的統一ある一色の生活である。即ち其處には統制がある。これが又一つの人間的特質である。故に、二つは總括して、人間としての原則であると言へるであらう。そこで其の原則に對して、人が自覺して生きてゆくことが即ち仁である。又今一つは、自分以外の者に對する考へを離れずに行く所に仁がある。即ち道があるとする。別に又、徳といひ、理といふのも皆それに當つてゐる。なほ又仁は人の本心であるとも云ふが、その本心が完成すると徳になり、更にそれが原則となれば理に成る。故に心の徳といひ、愛の理といつても、凡ては皆一つである。己を自覺すると、人を忖度する事が出来る

やうに成り、自分だけ生きようとする事が人の本質でなく、並び生くることが人の本質になる。そして其の爲に人を愛し、又人の生命が危険に瀕した時には、本能的な働きをする。佛教では布施を云ふが、布施の大切な點は、その自らの行爲を忘れる事である。己が名譽の爲とか何とか有目的な布施は布施にならない。要するに仁は人の本質から出るもので、人として仁心がなければ人とは云へないのである。

要するに、人として生きてゆく事、即ち自覺ある依存的な生活が仁を起すのであつて、其れを律する原則は理であり、人の本務から言へば人道であるといふ所に仁の解釋は落ちつくのであらう。

以上仁とは如何なるものであるかを略説したが、佛教では慈悲をいひ、基督教では博愛を説き、此の三つは相關聯して同意を有すると解せられてゐる。古來三教同旨を説くものも亦多くは、儒佛道の三つを以て同じものとし、佛教の慈悲、儒教の仁を一つに視る外、殊に又老子一系の道教で説く感應も同じものであるとしてゐる。斯の如く仁と慈悲博愛とは同じものとして考へられ易いから、次に先づ慈悲を説かう。

慈悲とは何か。要するにこれは抜苦與樂である。慈は即ち一切衆生に樂を與へることを意味し、悲は即ち一切衆生の苦を抜くことを意味する。此の意味に於て慈は積極的に與へ、悲は消極的に苦を免れしめんとするものと『智度論』には解してゐる。又同じ智度論には、慈悲には衆生縁・法縁・無縁の三縁

ありとしてゐる。衆生縁の慈悲は一般の者に對し親みを持つ事であつて、親兄弟の如く人々に親む事である。次に法縁の慈悲は佛教の道理を教へる法であるが、これはまだ佛の域にまで達しない程度で、只凡てに於て我慾を能化するものである。最後に無縁の慈悲とは佛の慈悲であつて、是が一番大きな慈悲である。では佛とは何かと云ふと、龍樹は、佛の本體を以て慈悲と般若に歸すとしてゐるが、其の慈悲とは我が一族我が同類に限られる小慈悲でなく、廣大の慈悲であり、般若も亦、あらゆるものに透徹する大智である。故に佛とは人間の理想的な人格であつて、智仁を體得するものである。さて以上は佛教に於ける慈悲の略意であるが、それでは基督教でいふ博愛とは如何なることを指すかと云ふ、バイブルには「汝の敵を愛せよ」とある。又「人なんぢの右の頬を批たば亦ほかの頬をも轉らして之に向けよ」ともある。更に又、「己の如く爾の隣を愛すべし」とも教へてゐる。斯の如く同隣人・同國人は勿論、他國人も敵をも博く愛する所に博愛の精神が存するのである。パウルゼンも亦博愛を説いてゐるが、それは有力なる同情であつて、進んで他人の困難を救ひ、福祉を増進する事を意味してゐる點に於て、佛者の大慈大悲に當る。困難を救ふのは即ち慈であり、福祉を増進するのは悲である。他人の爲に盡し、敵を愛する、それが博愛である。隣人の愛から擴がつて更に敵を愛する所まで徹底する、其處に博愛が存するのである。

博愛の精神は大體右のやうなものである。故に國境もなければ、宗教の差別、人種の差別もない。そこでパウルゼンは基督教の博愛を評して、基督教では博愛が最後の審判に役立つとしてゐる、即ち審判の標準は博愛の如何、換言すれば、どれだけ敵を愛したかにあるのだから、此の言葉は大なる使命を持つてゐるとしてゐる、併しながら我々から觀れば、此の大使命は自殺的である、それは所詮實行の不可能な理想に過ぎないからだと論じてゐる。即ちパウルゼンの立場から觀るならば、我が心を推して人に及ぼすとか、親を捨て置いて隣人を愛するといふやうな事は、在り得べからざる事だとするのである。

さて私は、以上に於いて大體、仁・慈悲・博愛の三つを束ねて説明したが、要するに、宗教の上から言ふと、理想論になるが、やはり人道の方が、役にも立ち、又當面的でもある。そこで結局は道と教との比較論優劣論に歸するであらう。慈悲も結構であるが、やはり實現は容易でない。所謂三縁の慈悲の中でも衆生縁はいゝが、法縁以上となると出世間的で、此の人間社會から分離せねば、それは行へない、即ち人道を絶たねばならぬ、とすれば實現不可能である。又、基督教では頻に博愛を説くが、現に基督教國では口に正義人道を唱へながら、其の行ふ所は、やはり民族中心國家中心であつて、一向に敵を愛せず皆博愛に反いてゐる。是等を考へると、人間として生きてゐる以上、やはり人道を経とし、近きより遠きに及ぼす仁の道徳が、最も我々にふさはしいものではあるまいかと思ふ。